

おかげで世界が広がったかな。

認知症とともに 本人の思い ②

「認知症になったおかげで世界が広がったかな」「こうなったら楽しめるだけ楽しみたい」。これほど自然に、これほど前向きな言葉を認知症の人から聞いたのは、記者として初めての経験でした。ポジティブに認知症を生きる近藤英男さん(65)に、その思いを聞きました。

近藤 英男さん(65)

57歳で診断、フォークデュオを結成しライブ活動

「認知症どまんなか」の近藤と申します。講演でユーモアをまじえて話を切り出すと、会場の空気がやわらぐ。若い頃から場を盛り上げる役回り。じゃれも得意だ。面白いことが好きですから、基本的に、笑いがあるとうれしい。なんでも面白いほうにもってっちゃおう。そうすると気持ちも楽です。「近藤は認知症になってからのほうがだじやれがされるようになった」なんて友人は言ってますけど。

「かまくら認知症ネットワーク代表理事で介護事業所を運営する稲田秀樹さん(57)と、フォークデュオ「ヒデ2(ツ)」を結成したのは去年1月だ。「ナンチャッテ」でバンドでもやりますか」と持ちかけたのは近藤さん。認知症の講座から商店街のお祭りまで、ライブは30回を超えた。好きな曲ですか? 「見上げてご



散策中の公園で歌声を披露した近藤英男さん(左)。稲田秀樹さん(右)とフォークデュオを結成している。神奈川県鎌倉市、仙波理撮影

重いものは捨て 面白い道まだまだ進める

らん夜の星を」とかたくさんありますよ。ライブはテンションあがりますね。気持ちがいいですよ、本当に。友人の集まりではサイモン&ガーファンクルとか英語の歌もやります。(認知症と明かして人前に立つことに)ためらいはない。へんな気持ちばばんと捨てちゃおう。

「おれ忘却力強くなっちゃってよ」。近藤流の言い回しで学生時代の友人たちにも認知症だと伝えた。親しい友との交流は診断から8年が過ぎても続く。友人の1人と毎週、近所を散歩するのが楽しみだ。

返子はね、近くに海も山もある、いいところです。小学校以来の友人と昔話をしながらあちこち歩く。相手も楽しみにしてくれている。いつもね、「次はどこ行くか」って話をして終わりますね。

「ライブで演奏しても帰宅すればその日の出来事は記憶から失われている。認知症として記憶障害をどう受け止めているのか?」

診断を受けたときは「まさか自分が」「ありえない」と落ち込みました。症状の進行も心配です。でも、ぐちゃぐちゃしているのは好きじゃない。「しゃべらない」と切りかえしました。追いかけてもつかまらないものは「なし」にしたほうが気楽です。友達とわいわいやるのが、そういうことはできていなくて、これはこれでOKかな。

「認知症700万人時代に向かう日本。いつか認知症になる、未来の当事者に伝えたいことは?」
ネガティブにならばきりがいい。それなら楽しい方向に話をもってい

「今日を前向きに」教えてくれる

インタビューの約1時間後。公園散策中の近藤さんに声をかけると、もう取材のことは覚えていなかった。それでも笑顔で記者と話をしてくれる。「ヒデ2」のマネジャー役として一緒に活動する妻・小夜子さん(60)は「こういうイベントやライブの機会があるから、夫は生き生きしていられるのだと思う」と話す。

「ヒデ2」で相方を務める稲田秀樹さんは「支援者ではなくヒデ2のメンバーとして、いつまでも2人で演奏を続けたいと思う」と言う。近藤さんが自然体で教えてくれる「明日への不安があっても今日を前向きに過ごす大切さ」。稲田さんは、多くの認知症の人や家族にそれを伝えたいと考えている。(編集委員・清川卓史)

「認知症でもそういう風に(考え方)をコントロールできます。たぶん私は、認知症にならなければ、本当に平凡に人生が終わっていたと思う。認知症になったおかげで、面白い場に連れ出されたり、こうして話をきいてもらったり、色々なことがある。世界が広がったかな。表通りを少し外れた路地裏の面白い道にいるような。まだまだ先へ進めると思っています。私はたぶん「軽い」。ただ「軽い」だけです。みなさん、重いものは捨てましょう。

こんどう・ひでお 神奈川県逗子市在住。理化学機器の営業マンだった57歳のときアルツハイマー型認知症の診断を受ける。デイサービスに通いながら、様々なイベントで講演やライブ演奏をしている。